
蓮の香りと君の声

椎名真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蓮の香りと君の声

【Nコード】

N2158F

【作者名】

椎名真琴

【あらすじ】

由香は、韓国で、韓国人の男性に出会う。お互いに惹かれあってゆく二人の、恋の物語。

序章

眩しくて一瞬、目を細める。
ハングルで多い尽くされた国。

韓国。

「あつという間ね」
由香は、ひとりごちた。

インチョン空港を出たところのバス停で、長距離バスを待っている。
実感が湧かない。

本当にここは韓国なのだろうか。飛行時間は1時間もかかっていない。
機内食をあたたかく食べ（韓国の航空会社だったので、ビビンバを堪能した）、お茶を飲んでいると着陸サインが出た。そうしたらあつという間に機外に急き立てられ、気が付いたら大きなスーツケースを抱え、かの地に降り立っていた。

たくさんの人でごったがえしている空港。そのほとんどが韓国人なのだろうか。日本人なのかもしれない。だが、見分けがつかない。ラフな格好の旅人もいれば、いかにもビジネスマンといった、パリッとしたスーツに身をつつむ男性もいる。
家族連れが、大きなスーツケースを、そして手押し台車にたくさんのおみやげを入れて運んでいる様子をぼうつと見ながら、由香は、手持ち無沙汰に立っていた。

ふと、自分の姿をしてみる。赤いポロシャツにGパン、肩まで揃った黒髪。そして、赤いスニーカー。赤が好きだった。成田空港では目立っていたのだが、ここでは、とくに問題はないようだ。

独特の、ざわざわした空気。うるさくはないけれど、静かでもない。ひっきりなしに人が出入りしている。

そして。

耳に入る音が、違う。ざわめきの中に、独特の発音が混じる。由香はその発音を、よく知っていた。

韓国語のアナウンスが繰り返し流れる。

便のお客様、搭乗カウンターまでお越しく下さい。

由香は、思わず、ぽつんと洩らした。

「本当に、韓国なんだ」

またこの国に来ることができなんて、1年前は思いもしなかった。2度目のこの国、そして今度は観光ではない。

「留学、ね」

気が付けば、長距離バスが停留所に到着しようとしていた。

第一話

大学構内の、桜の木の下に、掲示板がある。

4月はそれは見事に桜が咲いていたが、いまは五月。すでに、緑色の葉が生い茂っている。

二年生の春であった。

休講がないだろうか、由香は掲示板をじつと眺めていた。

「か、由香」

遠くから呼ぶ声が聞こえる。

由香はちらつと振り向いた。

友人の庸子だった。いつになく急いで、小走りで駆け寄ってくる。

「どうしたの」

こういう風に声をかけてくるのは、珍しい。

ピアスを直しながら、由香の傍へ近づいてきた。

庸子は紺のジャケットに水玉のスカートという格好。

アクセサリーもきれいに身に付けていて、嫌味なくお洒落だ。

髪もゆるやかなパーマで、つややかな栗色に染めている。

庸子に知り合ったのは今年度に入ってからだが、いつ見ても華やかで、すぐに見つけられる。

それに比べて由香は　ジーパンに、地味なジャケット。髪を染めるのは面倒だし、派手な服を着こなす自信など元からなかった。見れば見るほど、対照的だとつくづく思う。

それでいて、仲はいいのだから不思議だ。

「ねえっ」

庸子は息を整えて、テンションの高い声を上げた。

彼女はたとえば、クラスの代表的な立場なんかに、進んで出ていってしまうような人で、いつも積極的で前向きであった。どちらかと言うと消極的な由香は、たまに、彼女が眩しく見えることがある。

「七月の試験終わってからすぐの頃、暇かな」

彼女の耳の輪っかのピアスが、揺れる。

それを眺めながら、由香はいぶかしんだ。

七月って　今はまだ五月だ。一体どういうことだろう。

それでも由香は答える。

「そうねえ、レポートでもやってると思う」

今学期、専門科目のレポートがたくさん出そうなの、と付け加える。

庸子は、しかし、それには構わずに言った。

「レポートか。ね、それじゃ、私と一緒に韓国研修に申し込もうよ」

「え」

突拍子もないことを言われ、由香は軽く、混乱した。

「韓国って。な、何の話」

何とか声を絞り出した。

「まったくわからなくて」

そりゃそうだろうと言わんばかりに、庸子が説明をまくし立て始めた。

「あのね。韓国の慶安大学と、うちの桐尚大学と」

「うん」

「交換留学先の大学と、交流会みたいなものを毎年してるんですって」

「ああ、うちの大学と、何だっけ、協定があるんだったよね」

その大学の名前、シラバスかどこかで、見たことあるかもしれない。庸子はさらに説明を続ける。

「そう。そこで、韓国語を習ったり、文化体験の研修をするらしいよ。」

渡航費を援助してくれるらしいし、滞在中は費用もかからないよ。面白そうじゃない」

「うん、面白そうだね」

あくまで他人事として答えたつもりだった。

しかし庸子は、始めに言ったことを、丁寧にも繰り返してくれた。

「ね、一緒に申し込もうよ」

一生のお願い、と言わんばかりに見つめられる。

微かに、動揺した。

「なぜ、私なの」

庸子は、第二外国語が韓国語だ。

そんな彼女は、韓国語に縁のない私から見ても、一生懸命勉強しているな、と感じるくらい、きちんと取り組んでいた。

そんな彼女が、韓国に行ってみたいと思うのは当然だろう。

そして、同じ韓国語のクラスにも友達はあるだろうに、よりによって語学オンチの私を、選んだらしい。

先に頼んだけど断られた、とか。

しかし、彼女に頼まれて断れる人はいるのだろうか。

庸子の勢いに押されそうになりながらも、由香は反論した。

「だからね、庸子は第二が韓国語だったからいいかもしれないけど、私、ドイツ語だよ。無理だよ」

それについてはバッチリよ！といわんばかりに力強く答える。

「大丈夫、韓国語能力ゼロの人でも大丈夫って、書いてあったものにわかには信じがたい。

だって、言葉ができなくて、どうやって過ごせるっていうの。

「それでもできる人が集まるんでしょう」

なお、食い下がって反論してみるも、庸子は介さないようだった。

「わからないわ。とりあえず面接に行きましょうよ」

「え」

韓国に行くための面接を受けに行く。まったく、実感が湧かない。

英語も、ドイツ語も、頭の中で、粘土をこねくり回したようにごっちゃになってるような、語学下手な私が、海外へ行こうとするなんて。

「試しに、付き添ってくれるだけでもいいわよ」

彼女なりの譲歩なのだろう。

「そうね」

掲示板の傍の桜の木を見やりながら、由香は逡巡した。

いいかもしれない、と思い始めていた。

大学生になって、順調に2年目を迎えた。
何か生活に変化が欲しかった。

「行こうかな」

あくまでも軽い調子で、庸子に返した。

その刹那、風が吹いた。

高く、高く、地面の葉を巻き上げていった。

第二話

「はじめまして、由香といいます」

チヨウメ、ペッケツスムニダ。ユカラゴ、ハムニダ。

たどたどしい韓国語で挨拶をすると、しかし、大きな拍手が返ってきた。

ここは、韓国・慶安大学の会議場。

韓国滞在一日目。

ここで、日本からの研修生のための、小さな式典が催されていた。式典というくらいだから、大学側の偉い人も、何人が出席していた。

うまく言えなかったのに、拍手なんて。

不安の中で、他の日本人学生たちの挨拶を聞く。
みな、それなりに流暢に、時に笑いを取りながら、自己紹介をしていた。

場違い感が、急に押し寄せる。

ここで、うまくやっていけるのだろうか。

だが、由香はすでに、彼らの視線の温かいことをわかり始めていた。それは、まるで、由香の背中を後押ししてくれるかのようだった。

きつと、大丈夫。

滞在中に、しつかり韓国語を学んで帰ろうと決意したのだった。

滞在先は、大学寮。

小ぢんまりとしていて古い建物だが、清潔感はあるし、何より、居心地が良い。

夏休みなので学生が実家に帰っており、その期間を利用して、滞在させてもらうのだ。

二人部屋で、由香は庸子と一緒にの部屋になった。

もちろん、二人が喜んだのは言うまでもない。

プログラムの内容は聞いていたのだが、想像よりもハードだった。

まず、最初の一週間は、一日中、韓国語の授業を受け、残りの一週間は、韓国の文化体験に参加することになっていた。

韓国語の授業には、由香のような初級レベルの人がいれば、庸子のような中級レベルの人もある一つのクラスにいる。それぞれでバラバラであった。

きっと韓国人の先生も迷ったのだろう。初日はハングル文字を発音していたのに、授業の後半になると、歌の歌詞や映画の台詞の聞き取りなど、一部の者を除いてついていけない、非常に高度な内容になっていた。

そして、残りの一週間は、文化体験。韓国の伝統的な踊り、楽器、歌、料理、儀式などを習った。

日本のものとは、似ていてもまったく違う文化に触れる日々。

暗くなると、仲間と街へ繰り出す。

お酒を飲みながら、珍しいつまみを食べたり、ちょっと深い話をしたり、かと思えばクラブで遅くまで踊ったりと、日本では考えられない夜を過ごした。

なので、次の日の朝になると、みんな眠そうな顔をして、集合するのであった。

第三話

滞在中は、韓国の人たちとの交流もあった。

いかにも観光中という出で立ちで街へ出ても、
カフェでおしゃべりしていても、

まったく、知らないはずの由香たちに、
彼らは、気さくに話しかけてきた。

片言の、つたない言葉で、ゆっくりと返事をする。
充実感がひたひたと、体を満たすのが分かった。

滞在先の大学の日本語学科の人たちが、由香達に付いてくれること
もあった。

サポーター兼、遊び相手である。

そのリーダー格の男はユン・ソンホと言った。

いつもニコニコしていて、商人のような達者な口ぶりで話す。

たまに、アニメの絵が入っているＴシャツを着てきて、皆を閉口さ
せたけれど、

気さくな男で、毎日のようにあった飲み会には、必ず出てきた。

そして決まって、おどけて冗談を言い、場を盛り上げてくれるので
あった。

そんなある日のこと。

こちらに来てから、毎日の恒例となっている、焼肉とジンロを囲む、
飲み会の席上のことだった。

ソンホが相変わらず、マシンガントークを炸裂させている。

と、由香は、ソンホの隣にいる男が気になった。
誰と取り立てて喋るでもなし、酒を静かに飲んでいる。

染めている人が多い中で、黒髪で、こざっぱりした印象だ。
服のセンスも、よく言えばシック、悪く言えば…地味かもしれない。
それでいて、ちょっと暗い雰囲気があるひと。

その男に気を取られているあいだに、ソンホが仕切って会話は進んでいた。

「庸子ちゃんは、何勉強してるの？」

由香は、ソンホと庸子を、横目で見た。

庸子は、韓国に到着してからは、大抵、韓国語で会話をしていた。

由香は庸子と同じ便の飛行機に乗りやってきたのだが、どのバスに乗ればいいかで、すっかり悩んでしまった。

終点まで行けばいいわけでもなく、似た地名の多い看板の前で、二人は混乱の極みだった。

そのような中、庸子が、チケット売り場のお姉さんと辛抱強くコミユニケーションを取ってくれ、やっとのことでバスに乗ることができたのだった。

基礎の発音さえも危うい由香だけでは、きっと、目的地までたどり着かなかったに違いない。

ただ力関係、或いは語学力の差というものがあるのだろうか、
ソンホが日本語を話してくれる方が楽なので、

庸子もそういうときには、無理をせず、日本語で会話しようとして

いるようだった。

「私はアジア史。韓国史を特にやろうと思って」

「おお、難しいのに凄いね」

「でしょ」

「うんうん」

ソンホは、日本のドラマを毎日見て、日本語を勉強しているだけあって、日本語を流暢にしゃべる。

韓国語の勉強を頑張ると決意したわりに、由香は、ソンホに頼りっぱなしである。

お安い御用とばかりに、すすいと助けてくれるものだから、つい、通訳をお願いしてしまうのだった。

ソンホが、由香に水を向けてくる。

「由香ちゃんは何の専攻？」

「私は日本文学を勉強している……ところ。あ、韓国は関係ないけどとっさに付け加えて、

「このプログラムは、庸子に連れられて来たの」

つい、言い訳がましい言葉が出てしまった。
気分を害さなかったかな？

ソンホは「いい人」だったらいい。私の小さな心配なんて、さっと流してくれた。

「そっかそっか、でも楽しいでしょう、韓国」

じわっと、心に、優しい気持ちが増える。

そう、こんなに楽しいなんて、知らなかったよ。
力を込めて、答えた。

「うん、すごく楽しい！」

すると、ソンホもにっこりと笑ったのであった。

「よかった」

ソンホの隣の人。

「あの、その人、しゃべらないけど、どうしたの」

由香は目でちらっと、その男に視線を投げかける。

「あ、こいつはさ、チェ・ジウンっていうんだ。日本語はそれほどできないけど」

肩を抱いて由香の方向を向かせ、説明した。

迷惑そうな表情をしていたが、こちらに向かって一礼してくれ、後はしゃべらなかった。

「あ、何かちょっと、最近、落ち込んでさ。でも、みんなでいた

方が楽しいかと思って」

どうやら、気分が乗らないところを、無理矢理連れてきたようだ。無口で慔然とした表情でいたのは、そのためかもしれない。

あまり話しかけると、迷惑かもしれない。

由香は気を取り直し、しばし、その場の会話に興じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2158f/>

蓮の香りと君の声

2010年10月25日20時04分発行